

CAGLIERO 11

カリエロ11 サレジオ会
宣教ニュース

N.142 - 2020年10月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信

世界宣教の日： 祈り、犠牲、そして連帯

宣教顧問 アルフレド・マラヴィジャ神父 SDB



10月は全カトリック教会にとって宣教の月です。その頂点となるのは、10月の最終から2番目の日曜日の、世界宣教の日の記念です。世界宣教の日は、信仰弘布会の要請を受け、ピオ十一世によって1926年に制定されました。世界宣教の日は、教皇による毎年のメッセージを通して、教会がその本質から宣教するものであることを私たちに思い起こさせます。そのため教会のメンバー一人ひとり、諸国の民への宣教mission ad gentesの責任を共に担うよう呼ばれています。すなわち、信仰をまだ受けていない人々と信仰の賜物を分かち合うよう、呼ばれています。

良く準備され、本物の熱意をもって体験される「宣教の日」は、宣教の意識を持つ信仰者を育てる貴重な機会になります。宣教を活気づける組織的な取り組みを通して、すべてのカトリック信者は、教会の使命に積極的に参加するよう心を動かされます。何よりも、祈りによって、また、病を通して、あるいは日常生活の中で与えられる犠牲をささげることによって、参加するのです。決して切り離されることなく祈りと犠牲に結ばれているのは、教会の宣教活動の物的・経済的必要性のための連帯です。教皇ピオ十一世、ヨハネ二十三世、ヨハネ・パウロ二世は、賢明にも、世界宣教の日に集められる献金をすべて教会の宣教活動ad gentesにあてることとしました。実に、信徒からの経済的なささげものは「教会の建設のため、また愛のあかしのために欠くことのできないものです」が、「信仰によって啓発され、駆り立てられなければなりません」(『救い主の使命』81)。

さまざまな形で教会の宣教活動にあずかることにより、信徒一人ひとりの信仰は成長し、強められ、「新鮮な意気込みと新しい刺激」(『救い主の使命』2)をもって、再びいのちを吹き込まれます。「世界宣教の日」が、毎年、宣教地のための祈り、犠牲、連帯を促進するものとなるよう、私たちEPCのすべてのメンバーが働く機会となりますように：深いキリスト教的伝統のある所、あるいは信仰を受け取ったばかりの場所、財源が十分にある、あるいは貧困にあえぐ場所、自由に発展している、あるいは迫害に苦しむ場所、さまざまな宣教地のために!

振り返りと分かち合いのために

- 世界宣教の日を通して、宣教の意識をどのように育むことができるでしょうか?
- 宣教地支援の祈りと連帯を促進するため、EPCはどのように働くことができるでしょうか?



1875年以来、毎年、宣教地へ赴く宣教師たちは、豊かな意味を持つ十字架を受け取ってきました。

Da Mihi Animas Coetera Tolle : ドン・ボスコの子らを初めから特徴づけてきたモットーです。この短いサレジオの祈りは、宣教という文脈で特別な輝きを放ちます：自分が遣わされる人々のため、限りなく自らをささげるために、人々の救いの道具となるために、すべてを置いて、故郷、安住、自らの文化さえも後にすること。

聖霊はヨルダン川でそうされたように、良い羊飼いの上に降ります。今、教会の司牧のダイナミズムのうちに現存されるキリストの上に降られます。聖霊がおられない宣教活動、聖霊の光、聖霊による識別、聖霊の力と聖性の無い宣教活動は、ただ遠くの地で行われるというだけの、空しい活動の連続になってしまいます。

「だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」(マタイ28・19)、この言葉は、復活された方が与えた宣教の任務の中心にあります。この言葉によって私たちは、すべての人をイエスの弟子にする任務を受けているのです：ギリシャ語原文は、mathêteúate、「弟子にする」ことを強調しています。それはラテン語のdocete(教える)よりはるかに豊かな意味をもち、ほかの三つの動詞を通して実現します(19, 20節)：「行く」、「洗礼を授ける」、「教える」です。福音宣教には、「出向いて行く教会」の姿勢が求められます。言葉とわざによって、すべての人のもとへ届き、神の賜物の満ち満ちた豊かさを差し出すためです；師が私たちに明かしてくださったすべてを教える言葉；わざ：宣教師としての創意工夫に満ちた教育・司牧のすべてのわざ、率先した取り組みに満ち、最も貧しい若者に尊厳と人間らしさをもたらすもの；しかし何よりも、あらゆるわざの中で最も大いなるわざを差し出すこと：洗礼の秘跡の恵みに浴させることです。洗礼の恵みは、神の神秘、父-子-聖霊の交わりのうちにある満ち満ちたいのちにあずかるよう、すべての人を導くのです。

良いほうを選ぶ



宣教師としての私の召命は、中学を終えたころ、ベルギー出身のサレジオ会司祭、キンジャサで働いていたサッベ・アルベール神父に初めて会ったときに生まれました。サッベ神父は、オラトリオの若者たちや、私もその一員であった召命グループのメンバーにインスピレーションを与える存在でした。神父の熱意と若者と共に働こうとする意欲は私たち皆を惹きつけました。私はサッベ神父の生き方と模範に深く心を動かされました。養成の年月を通じて、その生き方、模範はずっと私の心の中にありました。哲学課程を終えた後、私は実地課程のため、南スーダンのマリディで宣教を体験する大きな恵みをいただきました。そこから、私の宣教師としての旅が始まりました。

宣教師として私が直面する挑戦や困難は、第一に言葉の挑戦です。ウガンダ北部の難民キャンプ、パラベクのようなところで働く際、一つ以上の言語を覚えなければなりません。ここでは、区域と地区に分けられた広大な居留地に人々が暮らし、人々は多様な部族に属し、さまざまな言語を話します。さまざまな言葉話す人々と意思疎通するのは、必ずしも簡単ではありません。

そのほかの挑戦は、人々の極端な貧しさ、居留地の中の移動距離、秘跡を授けるために人々と出会うのが困難なことです。パラベクが僻地にあるので、私自身、時には孤立感を覚えることもあります。グルなどの町まで行くのは大変で、カンバラは遠く離れています。私の最大の喜びは、秘跡を執り行い、若者、弱い人々、難民となっている人々にイエスをもたらすことです。難民の人々のただ中で暮らすことは、その生きるための闘いを理解し、可能なあらゆる方法で生活を分かち合うという喜びを与えてくれます。私にとってこれが、私たちのただ中に来られ、私たちの状況を共にしてくださったイエスの受肉を感じる、本当の宣教師の生活です。サレジオ会共同体の生活も大きな喜びを与えてくれます。兄弟たちはさまざまな国、大陸の出身です。私たちはサレジオのカリスマの活力と、共に暮らす幸せを分かち合っています。



このサレジオ会宣教師の召命を分かち合いたいと望む皆には、こう言いたいと思います。「良いほうを選ぶ」ように。すべての人への ad gentes 宣教師になることは、常に私たちを幸せにする尊い召命です。なぜなら主イエスご自身がこの体験を分かち合っておられ、ドン・ボスコの道にしたがってイエスの弟子となる喜びを、私たちは必ず見いだすからです。これまで出会ったことのない人々と出会うのを、恐れないようにしましょう。そのように歩むとき、私たちはただイエスの呼びかけに従っているのです：「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28・19-20)

ウガンダ、パラベクの宣教師 ジュリウス＝ルイス・マカランバ神父



尊者モンシニョール・ヴィンチェンツォ・チマッティ (1879 - 1965)、日本の宣教師。人生で失望を味わっていた教え子に、チマッティ神父は次のよう

に書き送っている。「『自分はもう終わった!』などと、そんな不協和音のような言葉を口にしないでください(私が、音楽が大好きなことは知っているでしょう)。父親としての務めを、自分にできるかぎり果たし続けなさい(あなたの妻と子どもたちのために)；生徒のために、教師としての務めを；個人の生活、社会人としての生活の中で、あらゆる側面から紳士としての(市民、信仰者の)務めを果たしなさい。主があなたに、体と魂において与えられた活動を、さらに直接、主にささげてください。ただ、家族の皆と、一人ひとりの条件や立場に即して、共に祈り、行いなさい。終わったなど、とんでもない……再び始める時です。あなたの務めにおいて、ますます活動的になるために。人として、教育者として、父親として、市民、キリスト者として……しかし、信頼と謙遜のうちに主に抛り頼まなければなりません、そうすれば、善いことに向けて、すべてがうまくいくのを目の当たりにするでしょう。」

サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ピエルルイジ・カメローニ神父

ボランティアと信徒宣教者のために



サレジオ会の宣教の意向

若いアニメーター、献身的な信徒の多くのうちに、宣教奉仕のために時間や能力を差し出したいという思いが生まれますように。

サレジオ会は、主の福音宣教の呼びかけに若者が応え関わるプログラムとして、サレジオ宣教ボランティアを促進しています。サレジオ会諸管区で、宣教ボランティア活動の勇気ある取り組みが、若者の間で盛んになり広がりますように。

